

【研究報告】

断定的な関係詞節とその主題・題述関係

女 鹿 喜 治*

【要 旨】

(i)のような文は統語的に異なる(ii)と同じ意味を表すが、これは(i)に含まれる不定的な関係詞は断定され、主節よりも重要な情報を担うことがあるためであることは既に指摘がなされている。

(i) I know a girl who speaks Basque.

(ii) A girl I know speaks Basque.

この小論では、このような関係詞節に関するこれまでの議論と例文を見直しながらコメントと分析を加えることによって、次のような知見を得る。(i)のような文の場合、単一の文だけでは主節と関係詞節のどちらが断定的なのかを判断しにくいことがあり、むしろ、談話が重要な役割を果たす。不定的な関係詞節は必ずしも先行詞によって表される対象をその部分集合に限定するわけではない。また、特定の用法の関係詞節と非特定の用法の関係詞節を含む文はお互いによく似た意味を表すことがある。だが、特定の用法では関係詞節が、非特定の用法では主節が断定的であるという点で、両者は実際には異なる情報伝達の仕方をしている。(i)と(ii)のような文は統語的に異なっているが、文の主題・題述関係という観点から見ると、文全体としては、同じ主題・題述構造を持っている。

【キーワード】 関係詞節, 断定, 主題・題述関係

1. はじめに

主節 (main clause) にあるはずの断定 (assertion) が従属節に置かれるという現象はこれまでに外置 (extraposition), 文末焦点 (end-focus), 文末重点 (end-weight), 談話の流れ (discourse), 前景化 (foregrounding) などの様々な観点から論じられてきている (cf. 福地, 1995; 村田, 1982, 2005; 女鹿, 2002; 安井, 1978, 2000; Hooper and Thompson, 1973; Huddleston and Pullum 2002; McCawley, 1981; Reinhart, 1984)。しかし、主題・題述関係 (theme-rheme relation) の観点からの分析は少ない (cf. Halliday and Matthiessen, 2004; Erteschik-Shir, 1997, 2007)。

この小論では、第2節と第3節で、断定的な関係詞節に関する先行研究によって得られた知見を見直しながら、若干のコメントと分析を加える。さらに、統語的には主節に従属するこういった関係詞節の文中での情報伝達機能と談話との関わり、そして、外置された関係詞節との類似性を見る。第4節では、よく似た意味を表す非特定の用法の関係詞節との違いを明確にする。そして、第5節では、このような

関係詞節を含む文の主題構造 (thematic structure) を考えてみる。

2. 断定は主節と関係詞節のどちらにあるのか

次の(1a-b)の違いは先行詞に付加されている冠詞の違いだけである。

(1) a. I know a girl *who speaks Basque*.

b. I know the girl *who speaks Basque*.

(Hooper and Thompson, 1973, pp. 490-491)

Hooper and Thompson (1973, pp. 490-1) の指摘によってよく知られているように、(1a)のような不定的な先行詞に後続する関係詞節は断定されるが、(1b)のような定的な先行詞の場合は断定されず、主節のみに断定が置かれる。実際、(1a)は次の(2a)と同じ意味だが、(1b)と(2b)はそうではない。

(2) a. A girl *I know* speaks Basque. (= (1a))

b. The girl *I know* speaks Basque. (≠ (1b))

(Hooper and Thompson 1973, pp. 490-1)

安井 (2000, p. 23) によると、(1b)のような関係詞節は先行詞の定性 (definiteness) を「老婆心的、だめ押し的に」支えている。換言すると、(1b)のよ

*日本赤十字広島看護大学

うな関係詞節は先行詞がもともと含意している旧情報をさらに明確に伝達する働きをする。これは、『彼女 (her)』と言ったのでは分からないだろうな。『あの女の子 (the girl)』じゃどうだろうか。それでもわからないかもしれない。では、『あのバスク語を話す女の子 (the girl who speaks Basque)』のことだと言えればわかるだろう」というような「女の子」を特定しようとする意識が話し手にあることを意味する。その一方で、(1a)の不定的な (indefinite) 先行詞に後続する関係詞節にはそのような意識がない。

不定的な先行詞を含む文では関係詞節に、定的な先行詞では主節に断定があることは、次の(3a)では not が関係詞節を、(3b)では主節を否定しているからもわかる。

- (3) a. I don't like to sit in a sports car *Mary drives*.
 b. I don't like to sit in the sports car *Mary drives*.
 (安井, 2000, p. 25)

安井 (2000, p. 24-5) によると、一般に、否定されるのは情報価値の高い新情報の部分であり、(3a-b) はどちらも「メアリーが運転する車には乗りたくない」と訳すことが可能であるが、不定的な関係詞節を含む(3a)は「スポーツカーに乗りたくないのではなく、メアリーが運転するのが嫌なのだ。彼女が運転する限り、乗るのはごめんだ」という意味を表す。それに対して、定的な関係詞節を含む(3b)では、メアリーの乗った車を単に指さして、「そのスポーツ・カーには乗りたくない」と言っても事実関係は同じである。(3b)はある特定のスポーツ・カー、例えば、ポルシェやメルセデスというような自動車に乗ることが嫌だということを表し、その乗りたくない「車」が何という車なのかをここでは「メアリーが運転する」ということばによって特定している。当然、(3b)には、メアリーがどんな車を運転しているのか聞き手にはわかっているという前提 (presupposition) があるため、この関係詞節は旧情報であり、談話の流れによっては、the sports car *Mary drives* は the sports car としたり、代名詞の it と置き換えることも可能である。(これは(1b)の the girl who speaks Basque についても同様である。村田 (2005, p. 55) によると、That is a novel *which he wrote* は談話の最初に話を切り出したときの発言だが、その一方で、That is the novel *which he wrote* では、この小説のことが既に話題になっており、「それが彼の書いた小説です」と言った用法とも、目の前に小説を見て、その小説を指しながらの発言である。もちろん、(3b)は前者に関わる解釈である。) その一方で、

(3a)の関係詞節はスポーツ・カーを誰が運転するのかを提示している新情報であるため、代名詞化することができない。

したがって、定的な関係詞節を含む文では主節に断定が置かれるが、その場合、関係詞節と先行詞は一つにまとめて代名詞に置き換えられることから、全体として単一の要素である。その一方で、不定的な関係詞節は断定されるため、先行詞と共に代名詞のような単一の要素にはできない。統語的には、関係詞節はどちらも主節に対して従属節として機能するが、情報伝達という観点から見ると、不定的な関係詞節の方が主節よりも断定されるため、主節の方が関係詞節に従属し、情報伝達機能が統語構造をねじ曲げている(福地 (1995, p. 11) のことばでは「意味伝達の上で節の主従関係が逆転している」と言える。

3. 不定的な関係詞節への情報価値の偏り

もう少し、(1a), (3a)のような断定的な関係詞節の例を検討してみよう。

村田 (1982, p. 253) によると、複文中に二つの主な命題内容がある場合、それぞれの命題の意味内容の比重に応じて、いずれか一方の命題が背景的情報となり、残りの命題が前景的情報となる。(1a), (3a)では、不定的な関係詞節が断定され、前景となり、その一方で、主節は背景となっている。これは、関係詞が文末に位置しているために、文末焦点と文末重点が自然にかかりやすくなっているためでもある。そのため、(3a)では、否定は主節ではなく、関係詞節に及ぶことになる。

また、Reinhart (1984, p. 796) によると、関係詞節のような従属的要素は背景 (background) となるのが一般的である。だが、(1a)と(3a)で見たように、これは必ずしも当てはまるとは限らない。特に、(1a)では、語用論的要因も関わっているため、関係詞節は断定的としか解釈できない。なぜなら、バスク語は世界の他のどんな言語とも異なる極めて独特な言語で、その独特さゆえに習得困難であることは常識であるため、(1a)の「バスク語を話す」という関係詞節の意味内容は主節の「女の子と知り合いだ」よりも意外性が感じられ、関係詞節の方に情報伝達の重みがかかると解釈されるからである。この「女の子と知り合いだ」を表す部分は福地 (2001, p. 22) が「情報量のない主節」と呼ぶものと同一で、一般的に、単独では伝達するに足る情報価値を持たない。(ただし、伝達するに足る情報価値を主節が持てば、前景と解釈することも可能となるはず

であるが、この詳細は不明である。) いずれにせよ、このような百科事典的な知識や常識、推論といった語用論的要因によっても、(1a)のような不定的な関係詞節が主節よりも高い情報価値を担い、前景 (foreground) となる。

文末に位置する不定的な関係詞節の制限用法と非制限用法との間には類似性があることは既に指摘されている。例えば、Swan (2005) によると、次の(4a-b)において、先行詞が不定的な場合、わずかな強調の度合いの違いはあるが、特定の (identifying) 関係詞節と非特定の (non-identifying) 関係詞節との意味の区別が難しくなることがあり、関係詞節の示す情報の「重要性が文全体の伝達内容の中で中心的 (centrally important to the overall message)」であれば、特定の (制限的) な用法の関係詞節が使われるのが一般である。

(4) a. We became friendly with some nurses *that John had met in Paris.*

b. We became friendly with some nurses, *whom John had met in Paris.*

(Swan, 2005, p. 485)

(4a) の特定の関係詞節が文全体の伝達内容の中心だということは断定されているということであり、主節の「私たちが数人の看護師と親しくなった」という意味内容よりも、関係詞節の「ジョンがその看護師にパリで会った」の方が重要な情報ということである。これは(4a)の関係詞節が(1a)と(3a)の関係詞節と同様の情報伝達機能を持っていることを意味する。また、(4a)は(4b)と伝達内容が確かに似ているが、(4b)には(4a)のように関係詞節に対する情報伝達上の偏りはなく、主節と非特定の (非制限的) な関係詞節は別個に断定されている。(これについては、第4節で詳述する。)

さらに、特定の関係詞節と非特定の関係詞節では、それぞれの先行詞の表す意味が異なると伝統的に考えられている。

(5) a. He has two daughters *who are studying music.*

b. He has two daughters, *who are studying music.* (=He has two daughters, and they are (both) studying music.)

(江川, 1991, p. 76)

江川 (1991) によると、(5a) では、娘の数は二人だけか、他にまだそれ以上かもしれないという示唆があるが、(5b) では、二人だけという解釈となる。つまり、(5a) の先行詞と特定の関係詞節は「(彼のすべての娘の中で、) 音楽を学んでいる方の二人の

娘」という意味を表し、先行詞によって表される対象 (この場合、「彼の (すべての) 娘」) の集合をその部分集合 (「(彼の娘の中で) 音楽を学んでいる (方) の二人の娘」) に限定する働きをしている。このため、音楽を学んでない娘が他に存在する可能性が生じる。その一方で、(5b) の非特定の関係詞節にはそのような読みはなく、あくまでも娘の数は二人だけである。

ところが、関係詞節が主節よりも断定的な場合には、これが当てはまらないことがある。

(6) She had two sons *she could rely on for help*, and hence was not unduly worried.

(Huddleston and Pullum, 2002, p. 1065)

(7) A: Have you been to Paris?

B: Yes, often: I have a brother *who lives there.*

(Huddleston and Pullum, 2002, p. 1065)

(6) - (7) は関係詞節が省略されているため、特定の用法としか解釈できない。Huddleston and Pullum (2002) によると、(6) は息子が二人以上いるかもしれないという解釈と二人だけという解釈の両方ができる。二人以上という解釈は(5a)に代表される伝統的な特定の用法の解釈の仕方である。この文の前半部だけを見れば確かにこの解釈は可能かもしれない。だが、この文は「二人の息子の支援を当てにできたから、あまり心配していなかった」という意味で、関係詞節が断定されている。なぜなら、*hence* を主節ではなく、関係詞節の意味内容と結び付けて、「あまり心配していなかった」のは「彼女には二人息子がいる」(主節) というよりも、「(二人の息子の) 支援を当てにできた」(関係詞節) と解釈した方が整合的だからである。したがって、(6) では、関係詞節が特定のでありながら、他の息子との区別は問題となっていない。

同様に、Huddleston and Pullum (2002) によると、(7) の関係詞節はパリにいる兄 (弟) とそうでない兄 (弟) の区別をしているわけではない。もし、区別するとすれば、伝統的な(5a)のような特定の用法の解釈となるが、「パリに行ったことがありますか」(Aの発話) に対する返答の「はい、しばしば (行ったことがあります)」(Bの発話の前半部) に後続するものとして相応しいのは「(兄が) そこに住んでいます (から)」(Bの発話の後半部の関係詞節) であって、明らかに、「私には兄が一人います (から)」(Bの発話の後半部の主節) ではない。このため、(7) でも、関係詞節が断定的であるが、だからといって、他の兄 (弟) のことを特に問題にしているわけではない。

(7)が(5a)のような伝統的な特定の用法として解釈できないとすれば、仮に(7)を非特定の用法と考えてみよう。そのように解釈すると、「兄が一人いる」と「(兄が)そこに住んでいる」がそれぞれ単独で断定性を持つことになる。Huddleston and Pullum (2002)によると、この解釈では「兄が一人いる」という主節の意味内容は「パリに行ったことがありますか」という質問に対する返答として不適切で、「はい、しばしば(行ったことがあります)」と「(兄が)そこに住んでいます(から)」との間の意味的整合性を欠いてしまう。このため、やはり関係詞節の方が情報伝達の中心で、特定のだと解釈せざるをえない。これは(6)についても同様である。

このように、不特定の関係詞節が特定の用法で、情報伝達の中心(断定的)である場合、その関係詞節は先行詞によって表される対象をその部分集合に必ずしも限定するわけではない。(これは(1a), (3a), (4a)の例にも当てはまる。)

このような解釈が生じる原因は情報パッケージ(information packaging)によると、Huddleston and Pullum (2002)は述べている。だが、筆者は前後の談話内容となる(6)のand hence...worriedと(7)のyes, oftenがそれぞれ先行する関係詞節の断定性を左右しているためであると考え。つまり、この現象は関係詞節そのものだけではなく、その前後の談話が関係詞節の解釈に影響を与えることによって生じる可能性がある。前後の談話が不明ならば、単独の文を見ただけでは関係詞節が特定のか非特定のかという区別は難しくなることがあり、また、情報伝達の中心が主節と関係詞節のどちらにあるのかを明確にするのも困難になることがある。したがって、今後は、談話の流れの中で文法的機能を観察するという動的な(dynamic)研究の必要がある。

ところで、外置は文末にある要素を移動させ、その要素に断定性を与える文法的機能である。当然、不特定の関係詞節も外置によって文末に配置されると、断定され、その関係詞節へ情報伝達の偏りが生ずる。では、文末に位置する関係詞節は常に断定されるのだろうか。

- (8) a. A letter just got to my office *which practically cancels the deal*.
 b. A letter *which just got to my office* practically cancels the deal. (=8a)
 c. ?A letter practically cancels the deal *which just got to my office*. (村田, 1982, pp. 252-3)
 (8a)の関係詞節は外置され、断定的で、(8b)と伝

達される情報が同一である。その一方で、(8b)において、主語に後続していた関係詞節を文末に移動すると、(8c)のように、容認性が低い。村田(1982, p. 253)によると、この理由は「手紙は届くのが当たり前」という語用論的要因によって、(8a-b)の「取引が実質的に取り消された」という意味内容が「手紙が届いた」という出現的な意味の動詞(verbs of appearance)を含む意味内容よりも情報価値が高く、予想外となるからである。このため、「手紙が届いた」という意味内容が背景で、「取引が実質的に取り消された」が前景となる。しかも、(8a)では、関係詞節が外置されると、その関係詞節は意味的・語用論的に際立ち(prominence)が与えられるという原則にも一致する。ところが、(8c)では、「手紙が届いた」という背景の情報関係詞節にあり、それが外置されているために、際立ちが与えられるべきでない部分にその際立ちが与えられてしまっている。このため、矛盾が生じ、(8c)は容認されなくなる。したがって、関係詞節が外置されても、それによって伝えられる語用論的要因によっては常に断定的で、前景になるとは限らない。興味深いことに、外置されているかどうかという違いがあるにしても、不特定の関係詞節が文末に位置するという点で、主節と関係詞節の伝達内容を入れ換えても同じ意味を表す(1a)と(2a)の関係とこの(8a)と(8b)との関係には類似性が見られる。

4. 関係詞節の特定の・非特定の用法

前節の(4)-(5)で、特定の・非特定の用法の関係詞節の情報伝達上の相違点を見たが、もう少しそれを詳述する。

McCawley (1981)によると、非特定の用法の関係詞節を含む疑問文に対する返答文を作った場合、

(9) Did you read Schwartz's exam, *which I left on your desk*?

- a. ??Yes, I read Schwartz's exam, *which you left on your desk*.
 b. Yes, I read Schwartz's exam.

(McCawley, 1981, p. 117)

(9b)のように、先行詞を返答文の中に入れるのはかまわないが、(9a)のように、関係詞節も含めると、「非常に奇妙で、粗野(both very odd and quite rude)」な文になる。(9a)と(9b)の容認性の差は、非特定の用法の関係詞節を含む疑問文では、疑問の対象が先行詞のみに及び、関係詞節はその対象外であることを示す。これは、文末に位置する非特定の関係詞節を含む文の場合、伝達される情報が主

節と関係詞節の部分で二つに分割され、関係詞節が疑問の対象から外されてしまうということである。換言すると、非特定の用法の関係詞節を含む文では主節と関係詞節がそれぞれ別個に断定されるが、一般に疑問や否定の対象となるのは情報価値の高い部分となるから、主節（「シュワルツの答案を見た」）の方が主要な (primary) 情報となり、関係詞節（「(答案を) 机の上に置いた」）は主節の意味内容に対する二次的 (secondary) な情報ということになる。これは (4b) と (5b) についても同様である。非特定の用法の関係詞節は主節の意味内容に追加的・付け足し的な (additional, supplementary) 情報を付け加えるに過ぎないと言われることがあるが、(9) のように、非特定の用法の関係詞節が疑問の対象になり得ないという事実はこのことを裏付けている。

(4a-b) のように、特定の用法の不定的な関係詞節を含む文と非特定の用法の関係詞節を含む文はよく似た意味を表すことがある。だが、(4a) のような特定の用法の関係詞節は文中で中心的な情報を伝達するのに対して、(9a-b) で見たように、(4b) のような非特定の用法の関係詞節を含む文では、主節が情報伝達の中心で、関係詞節は二次的な情報であるために省略も可能である。この点で、両者は異なる情報伝達機能を持つ。

5. 主題・題述関係

これまでの議論を踏まえながら、(1a) と (2a) を中心に、不定的な特定の用法の関係詞節を含む文の主題・題述関係を見てみよう。

Erteschik-Shir (1997, pp. 39-42; 2007, pp. 52-3) によると、(10) の a person は話題 (topic) で、is famous が焦点 (focus) となる。同時に、主部だけを見ると、この従属節を含む焦点構造 (f-structure) は (11) のようになる。(_ は空範疇 (empty category) を表す。)

(10) A person *I know* is famous.

(Erteschik-Shir, 2007, p. 52)

(11) A person_{loc} [*I know* _]

(Erteschik-Shir, 2007, p. 52)

(11) は実質的に (12) のような単文の焦点構造と同等で、特定の不定名詞句 (specific indefinite noun phrase) の a person が関係詞節の中の話題の I に対応する焦点となっている。

(12) I_{top} know [a person]_{loc} (Erteschik-Shir, 2007, p. 52)

このため、(10) は文全体としては (13) のような焦点構造で、(14) と同等な情報伝達機能を持つ。

(13) [[A person]_{loc-sub} [*I know* _]]_{top} [is famous]_{loc}

(14) I know a person. He is famous.

つまり、主部の a person *I know* (= I know a person) が談話の中に現れる段階では、a person は焦点となる。そして、is famous がその後が続くと、a person が話題として聞き手に理解されるという二つの段階を経ている。このため、(10) は「私にはある知り合いがいるのだが (第一段階)、その人は有名人なのだ (第二段階)」のように情報が伝達される。

(10) は次の (16) (=2a) と同等な情報伝達機能を持つ文である。また、(16) は次の (15) (=1a) と意味的に等価であるため、Erteschik-Shir (1997, pp. 39-41; 2007, pp. 51-52) の考え方に従うと、両者は次の (17) と同じ情報伝達の仕方をしていることになる。

(15) I know a girl *who speaks Basque*. (= (1a))

(16) A girl *I know* speaks Basque. (= (2a))

(17) I know a girl. She speaks Basque.

つまり、(17) から、(15) と (16) は「私はある女の子と知り合いなのだが、その子はバスク語を話す」のように情報伝達が行われていて、最初に前半部（「女の子と知り合いだ」）、次に後半部（「(彼女は) バスク語を話す」）の二つの段階を経ている。不定的な関係詞節を含む文の主節と関係詞節はどちらも断定的であると言われることがあるが、(17) はそれを証明している。(ただし、後半部の方が断定性が強いことは言うまでもない。) この関係詞節と主節の断定性のために、(4a) は (4b) のような非特定の用法の関係詞節を含む文との類似性が生じることとなる。

ところで、Halliday (1985, 2004) によると、次の (18) - (20) のような従属節 (副詞節, 分裂文の関係詞節, 名詞節) を含む文には文全体だけでなく、主節と従属節にもそれぞれ主題・題述関係が成立する。

(18) If winter comes can spring be far behind?

Theme ₁	Rheme ₁	Theme ₂	Rheme ₂
Theme		Rheme	

(Halliday, 1985, p. 85)

(19) It was his teacher who persuaded him to continue.

Theme	Rheme ₁	Theme ₂	Rheme ₂
Theme		Rheme	

(Halliday, 2004, p. 97; 1985, p. 60)

(20) I don't believe that pudding ever will be cooked.

Theme	Rheme ₁	Theme ₂	Rheme ₂
Theme		Rheme	

(Halliday, 1985, p. 59)

例えば、(18)-(19) の文には、主節と従属節に主題・題述関係が別々に成立するだけでなく、さら

に、それぞれの節の主題と題述 (Theme₁ Rheme₁, Theme₂ Rheme₂) がまとめられて、文全体の主題と題述 (Theme Rheme) を構成する。ところが、興味深いことに、(20) は (18)–(19) と異なり、文全体の主題の範囲が主節の Theme₁ と Rheme₁ だけでなく、従属節の Theme₂ にまで及び、残りの Rheme₂ のみが題述となっている。

(20) で、主節 (I don't believe) から従属節 (that pudding ever will be cooked) の主題 (Theme₂) までが主題となっているのは、主節に蓋然性 (probability) を表すモダリティ (modality) の機能が生じ、従属節が情報伝達の中心となり、従属節の中の話題的主题 (topical theme) の pudding が文全体の主題 (Theme) の一部となったためである。これは (20) の文を付加疑問文にすると、don't I? ではなく、will it? となることから明白である。このモダリティを表す主節と従属節の中の主題が共に多重主題 (multiple theme) を形成し、文全体の主題となる。ただし、文中で中心的な主題となるのは、(18) では if 節全体であるのに対し、(19)–(20) ではそれぞれ his teacher と pudding という主題の中の一部であることにも注目しておきたい。

では、関係詞節を含む文はどのような主題・題述関係となるのだろうか。Halliday (2004, pp. 85–6, 98–99) によると、関係詞はその特質として主題となる。当然のことながら、関係詞節の中の主題は主節の中にある題述の一部の先行詞から派生し、その後題述が続く。その結果、(18)–(20) と同様に、主節と関係詞節には主題・題述関係が別々に生じる。

Halliday (2004, p. 426) は関係詞節を階層下降 (rank shift) の例の一つとする。階層下降は節や句の埋め込み (embedding) によって生じ、埋め込まれた (つまり、修飾された) 要素は一つのまとまった構成要素として機能する。([[]] は階層下降節 (downranked clause) を表す。)

(21) the man [[*who came to dinner*]]

(Halliday, 2004, pp. 100, 426)

(21) では、関係詞節の *who came to dinner* は先行詞の the man に埋め込まれた構成要素であり、the man *who came to dinner* は全体として一つの要素としての働きをする。したがって、次の (22) において、関係詞節に主題・題述関係が生じてはいても、この関係詞節は the smart dinner party に埋め込まれた階層下降節であるため、(22) の文全体の主題は主節の主語の he となる。(下線部分は文全体の主題を表す。)

(22) He describes the smart dinner parties [[that

he and Robert have been to together]].

(Halliday 2004, p. 103)

当然、Halliday (2004, p. 100) が指摘するように、このような関係詞節は文全体の構成要素として機能することがなく、また、文全体の主題・題述関係の構成にもほとんど貢献することがない。

しかし、(22) の関係詞節は断定的なものであり、第二節で見たように、(21)–(22) のような断定的な関係詞節に当てはまることすべてが (15)–(16) のような不定的な関係詞節に必ずしも当てはまるわけではない。(15)–(16) を主題・題述関係という観点から見ると、(16) は (24) のようになるが、(15) は (23a) と (23b) の二通りの可能性が考えられる。(24) で、先行詞の後に省略されている関係詞は (whom) という形で主題として扱う。)

(23) I know a girl *who speaks Basque*.

	Theme ₁	Rheme ₁	Theme ₂	Rheme ₂
a. *	Theme		Rheme	
b.		Theme		Rheme

(24) A girl (*whom*) I know speaks Basque.

	Theme ₁	Theme ₂	Rheme ₂	Rheme ₁
		Theme		Rheme

だが、(15)–(16) は実質的に (17) のような情報伝達機能を持ち、最初に前半部 (I know a girl, a girl I know), 次に後半部 (*who speaks Baque, speaks Baque*) の順で二段階の情報伝達が行われることが既に判明している。また、それぞれの文の構造が異なっても、「女の子がバスク語を話す」を表す後半部が最も情報価値の高い部分であることも第二節で分かっている。このため、(24) と同じ主題・題述構造を持つためには、「女の子 (a girl)」が少なくとも文全体の主題の中に含まれていなくてはならない。(23a) は (22) と同じ主題・題述構造を持つ文で、I が文全体の主題である。その一方で、(23b) では、(24) と同様に a girl が文全体の主題の中にある。したがって、(23b) が (24) の主題・題述関係に最も近い。(そして、この主題・題述関係は基本的に関係詞節が外置された (8a) と主節の中に埋め込まれている (8b) にも当てはまる。)

(23b) と (24) の「女の子と知り合いだ」の部分は一単位の情報として最終的には文全体の主題となり、多重主題を構成する。また、両者の文全体の主題 (Theme) の中で、最も中核的な主題として機能しているのはどちらも a girl である。特に、(23b) の a girl は主節 (Theme₁ Rheme₁) の段階では主題でなく、題述の一部に過ぎないにも関わらず、文全体では、中心的な主題となっているのは興味深い。

この点で, (19) の叙述主題 (predicated theme) の一部の his teacher (Rheme₁の一部) と機能的に似ている。

もう一つ興味深いことに, (23b) では, 主節と関係詞節の中の主題・題述関係 (Theme₁ Rheme₁; Theme₂ Rheme₂) が直線的に繋がり, 文全体として, さらに大きな一つの主題・題述関係 (Theme Rheme) を構成している。この点で, (23b) は (18) - (19) に類似している。その一方で, (24) では, 主節 (Theme₁ Rheme₁) の中の主題 (Theme₁) の中に関係詞節 (Theme₂ Rheme₂) を埋め込み, 全体的に主題・題述関係 (Theme Rheme) を形成している。文全体の主題 (Theme) の中に二つの話題的主题 (Theme₁ と Theme₂) が存在するという点で, (24) は (20) に類似している。

6. ま と め

特定の用法 (制限的) の不定的な関係詞節は統語的には主節に従属する要素であっても, 文全体の中で中心的な情報伝達を行う役割を果たすことは既に判明している。だが, 単一の文だけではその判断は明らかではないことがあり, その最終的な判断は談話が大きな役割を果たす可能性があることが分かった。また, こういった関係詞節と外置された関係詞節との類似性も見られる。

このような関係詞節は先行詞によって表される対象をその部分集合に限定すると従来言われてきた。だが, 関係詞節が断定的である場合には, 必ずしもそうではないことが分かった。詳細は不明であるが, これも最終的には談話の内容によって左右される可能性がある。

特定の用法の関係詞節を含む文と非特定の (非制限的) 用法の関係詞節を含む文は両者とも似た意味になるという指摘がこれまでなされてきた。これは両者の主節と関係詞節がどちらも断定的であることが原因であるが, 特定の用法の場合は関係詞節が, 非特定の用法の場合は主節の方が断定性が強い。この点で両者は伝達機能が異なることが明確になった。しかし, 特定の用法の文の主節と関係詞節が同じ程度の断定性を持ち得るのかどうかは不明である。

(15) - (16) のような不定的な関係詞節を含む文は統語構造が異なっても, 主節と関係詞節がどちらも断定的で, しかも, 文の後半部の方がより断定的になるために, 伝達される意味が同じであることは既に指摘されている。これらの文を主題・題述関係という観点から見ると, それぞれ (23b) と (24) のよ

うになることから, この二つの文の主節と関係詞節の主題・題述関係が部分的には異なった形で結び付けられていても, 両者の文全体の主題・題述関係は基本的に同じであることが分かった。

参 考 文 献

- 江川泰一郎 (1991). *英文法解説* (第三版). 東京: 金子書房.
- 福地肇 (1995). *英語らしい表現と英文法*. 東京: 研究社.
- 福地肇 (2001). 情報量のない主節に続く関係詞節. *英語青年*, 147(5), 22-3.
- 村田勇三郎 (1982). *機能英文法*. 東京: 大修館.
- 村田勇三郎 (2005). *現代英語の語彙的・構文的事象*. 東京: 開拓社.
- 女鹿喜治 (2002). 主節と関係詞節の断定について. *英語語法文法研究*, 9, 141-155.
- 安井稔 (1978). *新しい聞き手の文法*. 東京: 研究社.
- 安井稔 (2000). 関係詞とその先行詞. *英語青年*, 146(9), 22-26.
- Bloor, T. & Bloor, M. (2004). *The functional analysis of English* (2nd ed.). Arnold.
- Erteschik-Shir, N. (1997). *The dynamics of focus structure*. New York: Cambridge University Press.
- Erteschik-Shir, N. (2007). *Information structure*. New York: Oxford University Press.
- Halliday, M. A. K. (1985). *An introduction to functional grammar* (2nd ed.). Arnold.
- Halliday, M. A. K. & Matthiessen, C. M. I. M. (2004). *An introduction to functional grammar* (3rd ed.). London: Arnold.
- Hooper, J. B. & Thompson, S. A. (1973). On the applicability of root transformations. *Linguistic inquiry* 4, 465-497.
- Huddleston, R. & Pullum, G. K. (2002). *The Cambridge grammar of the English language*. Cambridge: Cambridge University Press.
- McCawley, J. (1981). The syntax and semantics of English relative clauses. *Lingua*, 53, 99-149.
- Reinhart, T. (1984). Principles of gestalt perception in the temporal organization of narrative texts. *Linguistics*, 22, 779-809.
- Swan, M. (2005). *Practical English usage* (3rd ed.). Oxford: Oxford University Press.

Assertive relative clauses and their theme-rheme relation

Kiji MEGA*

Abstract:

Indefinite relative clauses in the sentence-final position sometimes tend to be asserted and carry more important information than main clauses, as in sentences like (i) below which carry the same meaning as ones like (ii), though they are syntactically different.

(i) I know a girl who speaks Basque.

(ii) A girl I know speaks Basque.

Past discussion related to this phenomenon covered many points of view (e.g. assertion, extraposition, end-focus, end-weight, discourse, foregrounding), but relatively a few analyses have been carried out from a viewpoint of theme-rheme relation.

This paper attempts to review and summarize earlier examinations of such relative clauses with supplementary analysis and comments, and suggests that it is sometimes difficult to decide which clause is asserted if we examine a single sentence containing a relative clause like (i); rather, discourse plays an important role. This type of relative clause does not necessarily classify into a subset the thing that its antecedent refers to. Analysis of the thematic relation of the sentences containing such indefinite relatives is conducted. It is believed that, even though syntactically quite different, sentences such as (i) and (ii) above have the same thematic structure.

Keywords:

relative clauses, assertion, theme-rheme relation

* The Japanese Red Cross Hiroshima Callege Nursing